特集
special feature

第22回鹿児島県国保地域医療学会

# 「地域医療を守るための後継者育成」～地域包括医療・ケアを更に進めるために～

鹿児島県市町村自治会館で平成26年11月22日、第22回鹿児島県国保地域医療学会が開催された。国保診療施設に勤務する医師や看護師、市町村国保の関係者ら約130人が出席し、「地域医療を守るための後継者育成～地域包括医療・ケアを更に進めるために～」をメインテーマに、研究発表やパネルディスカッション、特別講演が行われた。

## 地域包括医療・ケアの更なる推進

はじめに主催者を代表して鹿児島県国民健康保険診療施設協議会の川添健会長が「今年の5月16日・17日に奄美市及び瀬戸内町にて開催した第28回地域医療現地研究会では、全国から国保診療施設の方々218人の参加をいただいた。開催準備にご尽力いただいた奄美市役所及び奄美市住用国民健康保険診療所、瀬戸内町へき地診療所の職員をはじめ、県内からも多くの参加があり成功裏に終わりましたことに、この場をお借りしてお礼申し上げたい。

さて、昨年8月から進められている「社会保障制度改革」の中で、

今後とも「改革」の動きを注視していかなければならないとあいさつで述べる川添健会長

医療保険制度を取り巻く状況であるが、医療サービス等の提供体制として、病床の機能分化・連携及び在宅医療・在宅介護の推進、地域における医師、看護師等の医療従事者の確保など、平成29年度までを目途に講じていくとされている。本協議会においても、医師を始めとする医療従事者等の確保、施設運営の健全化など、多くの課題を抱えているところであり、今後とも、「改革」の動きを注視していかなければならないと考えている。こうした中、本日の地域医療学会は、「地域医療を守るための後継者育成」をメインテーマに「地域包括医療・ケアを更に進めるために」をサブテーマとして開催することとしている。本日の学会の成果が、今後の地域包括医療・ケアの更なる推進と様々な懸案事項の解決の一助になることを祈念し、私どもの施設が地域に根ざした住民の健康と生命を守る医療施設として、存在意義をますます高めていくことに繋げていきたい」とあいさつ。

続いて来賓あいさつをした鹿児島県保健福祉部の松田典久部長は「国保診療施設は、地域住民に対する医療の提供や、健康の保持増進への寄与という重要な役割を担っていただいているところだが、一方では、医療従事者不足や診療施設・医療機器の維持・整備など、現場の皆様方の御苦労は大変なものと伺っている。県としても、「ドクターバンクかごしま」等による医師の確保や、国庫助成制度等の活用を図ることなどを通じて、引き続き診療施設運営の支援に取り組んで参りたいと考えている。

引き続き診療施設運営の支援に取り組みたいとあいさつする保健福祉部の松田典久部長

国保診療施設に勤務する医師や看護師など多くの関係者が出席した

さて、国民健康保険制度については、持続可能な医療保険制度の構築に向けて、現在、国の社会保障審議会医療保険部会等において協議が行われている。内容としては、国保の財政運営を都道府県が担うことを基本としつつ、都道府県と市町村の間で適切に役割を分担するために必要な措置を講ずることとするというものであり、県としては、国民健康保険は国民皆保険の最後の砦として、将来にわたって持続可能な制度となるよう、全国知事会等を通じて、国に対し、引き続き必要な要望等を行って参りたい」とあいさつした。

## 診療施設間での情報の共有を図る

引き続き行われた研究発表では、臨床検査部門の座長を奄美市住用国民健康保険診療所の野﨑義弘所長が務め3つの研究が発表された。看護事務部門では、公立種子島病院の牛野雄二病棟看護師長が座長を務め4つの研究が発表された。それぞれの研究発表にフロアーから質疑が寄せられた。

また、今回発表された7つの研究発表の中から、肝付町立病院の中野明美看護師が発表した「肝付町立病院における5S活動取り組み状況報告」が、今年埼玉県で開催される第55回全国国保地域医療学会で鹿児島県代表としての発表に選ばれた。

研究発表後は、今回から初めての取り組みとして診療施設の紹介が行われた。これは、お互いの施設を知ることで少しでも県内の診療施設間での情報の共有を図ることを目的に今回から実施されることとなった。

今回は、南さつま市の南さつま市立坊津病院と薩摩川内市の里診療所の紹介が行われた。

坊津病院の野口和人事務局長は

## 研究発表

### 臨床・検査・事務

座　長
奄美市住用国民健康保険診療所
所　長　野崎　義弘

**鹿児島県三島村巡回診療定期受診中の患者様136名に対する疾患頻度の検討**

鹿児島赤十字病院
医師　柳　和寿

**瀬戸内町における医療連携と在宅ケア**

瀬戸内町へき地診療所
医師　平瀬　雄規

**国民健康保険特定健診データ等を基にした分析**

枕崎市健康課
保健師　畑野　裕子

### 看護・保健

座　長
公立種子島病院
病棟看護師長　牛野　雄二

**地域での口腔ケアの向上にむけた試み～初めての合同勉強会を通して～**

公立種子島病院
看護師　山下　弘子

**栄養指導の効果について～採血データの比較検討～**

枕崎市立病院
管理栄養士　長野　直子

**肝付町立病院における5S活動取り組み状況報告**

肝付町立病院
看護師　中野　明美

**既卒採用者へのサポートの現状**

枕崎市立病院
看護師　寺田　るみ

地域の特性や人口規模、高齢化率を挙げ南さつま市全体で35・7％、坊津地域で47・3％と坊津地域では65歳以上の方が約半分を占めていると地域の特性を説明した。

坊津病院の沿革については、昭和26年に西南方診療所として開設したのが始まりで現在は、常勤医師2人と非常勤医師4人が勤務しており、どこの病院や診療所も同じだと思うが医師と看護師の確保には苦慮しているところだと話す。そして高齢者が多い坊津地域において、坊津病院は身近なかかりつけ医療機関として日常の診療、特定健診、インフルエンザ予防接種など、地域になくてはならない病院となっていると紹介した。

続いて薩摩川内市里診療所を紹介した大村淳事務主任は、里診療所がある里地域は、甑島列島の北東部に位置し人口1200人余り、高齢化率は45％を超えていると話す。里診療所の診療科目は内科と歯科で無床の診療所となっており、地域の方々がいきいきとして安心して健やかに暮らせるまちづくりに貢献し、頼りにされる診療所を目指して頑張っていると紹介した。

地域になくてはならない病院となっていると紹介する坊津病院の野口和人事務局長

### モチベーションに内包される2つの要素

施設紹介の後は、特別講演が行われ、鹿児島県健康づくり運動指導者協議会の鹿児島・大島支部長として、市町村における健康教室や介護予防教室の講師として活躍している、株式会社ニチガスクリエート　アーバン・ウェルネス・クラブ　エルグの桑原祐一健康運動指導士が、これまでの経験を基に「動きの「コツ」で上がるモチベーション～「なぜ?」を共有する指導現場からのレポート～」と題して、参加者にやる気を起こさせる運動指導について講演した。

モチベーションという言葉には、一般的に言われる「やる気」と日本語訳した場合の「動機づけ」という2つの要素が内包される。最近の

保健指導の現場では、運動・栄養・休養それぞれのフィールドで、行動変容理論に基づいた指導が推奨、実践されている。

民間フィットネスクラブの会員は、人口比3%。彼らはお金を払ってでも「運動をしたい」という集団である。一方、保健指導対象者の多くは、「運動なんかしたくない、でも医者に痩せなさいと言われたから来た」という方々である。

そのような集団に行動変容を起こさせるには、十分なコミュニケーションにより、その方のライフスタイルを把握した上で、バリア要因を取り除くきっかけづくりを行うことが有効である。

民間のサービスとして、顧客満足度を得ることが出来る指導が上質なサービスであると言えるが、同じマニュアルに従ったようなサービスだけではなかなか満足度は得られない。なぜなら、対象者のニーズは多様であり、人それぞれモチベーションが上がるスイッチは違うからだ。

運動欲求を満たすポイントを分類すると①競争欲求が強い人②達成感を得ることで満足する人③自分の限界を克服して満足する人④リラクゼーション⑤表現に喜びを感じる人⑥模倣といった真似から入る人⑦健康づくりとしてしっかりとその日の記録を管理している人の7つに分けられ、個々に応じたアプローチが継続率や満足度を高める有効な手段となる。

実際に健診で有所見となり、教室に参加される方の多くは、運動へのスイッチが入っていない方々。彼らの中には、運動教室に来ているにもかかわらず「健診でひっかかったから来ただけ」といって身構えて来ている方もいるのが現状。そういう方々にどうやってスイッチを入れていくのか？

最近では、導入部分でスライドを活用して、筋力や柔軟性の左右差やバランスチェックを分かりやすく実践し、「気づき」を誘導する。さらに運動実践を通して楽しみながら会場の場を盛り上げ、運動の爽快さ、大切さを感じてもらっている。

また、公共の施設や地域支援事業で行う教室では、3カ月で終了となることが多い。その期間は良い結果を得られるものの、教室終了と同時に運動習慣が止まってしまうケースも少なくない。実際そのあとが大事で、自助・互助・公助の考えに基づいて、行政や地域を巻き込んだつながりを作り、運動の継続が可能な環境を整備してあげることが重要になってくる。

運動は「楽しい」という自己意識が芽生えることが大事。本人の気づきといった動機づけモチベーションがないと継続に繋がっては行かない。そして明確な評価指標を掲げ、見える化してあげるような環境をいろいろな形で提案すると学習意欲が湧いてくる。

また、地域力を高め、閉じこもりを予防する観点からも教室化は有効であり、その中で質の高い指導ができる人材を育成、確保していくことも今後の課題である。包括的なケアの為には、運動だけでなく運動と栄養がコラボしたり、運動と保健指導がコラボしたり、また最近では介護予防教室で、口腔と運動をコラボさせたりといったことが行われている。

そういった環境を作っていく中で、医師の指示の下、臨床に携わる方、我々を含めたサービスを施す側それぞれが役割を認識し、情報共有を行っていく必要があるのではないかと思っていると講演した。

運動実践を通して楽しみながら会場の場を盛り上げ、運動の爽快さを感じてもらうと話す桑原祐一健康運動指導士

スクリーンに映るスライドを見ながら左右のバランスチェックをする出席者

## 地域医療を守るための後継者育成

続けて行われたパネルディスカッションでは、「地域医療を守るための後継者育成」～地域包括医療・ケアを更に進めるために～と題し、司会者に公立種子島病院の野口靖彦院長、助言者に鹿児島大学大学院医歯学総合研究科国際離島医療学分野の嶽崎俊郎教授を迎え、5人のパネラーが今後の後継者育成のために大学で行っていることや、現在研修医として働いていること、学生として勉強していること、学生を受け入れる側としての考え、今後の専門医取得へのサポートについてそれぞれの立場から発言した。（発言内容は9ページに掲載）

その後、分科会が行われ事務部門では、「源泉徴収事務の留意点」と題して岩重公認会計士事務所の岩重洋一所長が講演した。看護部門では、「緩和ケア・ターミナルケアを身近なものに」～堂園メディカルハウスでの緩和ケア・ターミナルケア～と題して、堂園メディカルハウスの梅木隆志看護師が講演した。

閉会にあたり薩摩川内市里診療所の鈴木済所長がこの学会で得たことを各施設に持ち帰り、来年はより多くの方に参加していただきたいとあいさつした。

パネルディスカッションで司会者を務めた野口靖彦院長と助言者の嶽崎俊郎教授

それぞれの立場で発言したパネラー

「緩和ケア・ターミナルケアを身近なものに」と題して講演する堂園メディカルハウスの梅木隆志看護師

「源泉徴収事務の留意点」と題して事務部門の分科会で講演する岩重洋一所長

閉会のあいさつを述べる里診療所の鈴木済所長

## パネルディスカッション

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科
国際離島医療学分野　教授
離島へき地医療人育成センター
センター長　嶽﨑　俊郎

### 「島嶼地域を活用した地域医療教育」

私たちが、島嶼フィールドを教育の場として活用している理由は、同地域はマンパワーや医療資源が限られているからこそ、1つのモデルとして、医師や医療が理解しやすいからである。プライマリ・ケア、在宅医療、訪問診療、保健福祉を含めた地域包括医療やケアが必要とされ、実際に行われている。私は、離島は一種の小さな医療圏ではないかと思っている。その中で医師や医療がどのような役割を果たしているのかを現場で学生の目から見たとき、やり甲斐も含め、地域医療が理解しやすいのではないかと思っている。

鹿児島大学の地域医療教育は、全国的に見ても仕組や早い取り組みが高く評価されている。その要因として、離島へき地を教育の場として選んだこと、医学部に専門の講座やセンターが新設され体制が整ったこと、地域医療機関の先生方やスタッフの方が熱心に学生を受け入れ教育していただいたこと、離島医療に興味を持っている学生が増えてきたこと、行政の理解と協力、そして鹿児島大学が島嶼を重要課題の1つとして取り組んでいることなどがあげられる。今後とも、関係機関と協力して、医療人を地域で育て、地域医療マインドを醸成する取組みを続けていきたいと考えている。

県立大島病院
臨床研修医　徳永　拓也

### 「地域医療を守るための後継者育成　臨床研修医の立場から」

離島僻地医療人育成センターの理念は、「総合診療的医療を実践できる医師を養成し、地域社会に貢献する」こと、「国際的にも活躍する地域医療人を育成し、地域医療を発展させる」という中でいろいろなことを教えていただいた。

6年間の地域での研修で感じたことは、臨床に触れることのない時期の研修はすごく刺激になり、地域で働いている先生方の姿は、これからこのようになっていかなければいけないという励みになるものであった。地域枠の学生は研修に参加する機会が多く、地域医療に対する意識は他の学生よりは高いと思う。そして、地域を見るに当たってはその地域の特徴をよく知る必要があると感じた。

医学的知識はずっと身につけていかなければいけない。そして、地域を知り役割を理解することが大事である。できることは医療だけではない、その地域で何ができるか考えていく必要がある。自分が研修させていただいた、先生方のように自分が後輩の先生方の励みになるように頑張っていかなければならないと思った。

今後は、外科医になることが目標。地域枠の1人目の外科医としてどういうアプローチで専門を取得できるかを考えながら、後に続く後輩たちのためにも頑張っていきたいと思う。

鹿児島大学医学部医学科
医学生　田井村　依里

### 「地域枠を通して得たこと」

実習を通し、鹿児島大学の地域枠は鹿児島全体の医療機関や行政、地域、住民の方に支えられて成り立っているということを感じた。

そして、毎回実習後には勉強に対してのモチベーションが上がり、地域を支える医師になりたいという思いに駆り立てられる。しかしながら、鹿児島で将来働きたいという意識が高まってきている反面、先輩方が頑張ってはいるができたばかりの制度で少し不安もある。

こうした中、地域枠を通して得たことは、地域枠での活動や実習を通してたくさんのつながりができ、鹿児島の魅力について知ることが出来たこと。また、地域の先生方や住民の方に支えられているという意識を持てるようになったこと。このような機会をいただいて地域で働きたいと自然に思うようになり、支えて下さった方々に対して感謝の気持ちを忘れないようにしていきたいと思うようになった。

今後も地域や医療機関、住民の方々に支えられて勉強していくことに感謝しながら、鹿児島の医療に役立てる医師になりたいと思う。

長島町国民健康保険鷹巣診療所
所長　濵畑　弘記

### 「地域医療枠学生を受け入れてみて」

数年来、地域枠学生の夏期地域実習生を受け入れ、技術的なことカメラにしても関節注射・局所注射、エコーについては、一から手とり足とり教えている。

私が学生の頃、この地域枠の募集があったら1番に手を挙げていたが、残念ながら当時はなかった。

1年生だとつい3、4か月前まで学生で結局2年生くらいまでだと、まだ教養なので診療所や田舎の空気を吸ってもらう、医者の後ろ姿、手先を見てもらう、あと外来に行けば看護師さんが問診をとって血圧を測って注射を準備して採血してといった基本的なことを見てもらうしか実際のところできない。4年生、5年生になるともう少し違った接し方ができると思うが、1年生、2年生はなかなかそれができない。

いずれは地域枠出身の先生方に是非とも後を継いでいただきたいという思いで、学生さんを毎年これから先も受けいれて長島のいいところを感じ取ってもらえたらと思っている。

鹿児島大学病院地域医療支援センター
鹿児島大学大学院医歯学総合研究科　教授
地域医療学分野／離島へき地医療人育成センター
センター長　大脇　哲洋

### 「地域推薦枠医学生を取り巻く環境」

人口で単純に研修医の数を割った平均値を都道府県別に見たとき、鹿児島県は平均的な数よりも毎年38人少ない結果となっており、5年間もすると200人近く少ないということになる。これが累積すればするほど人数的な格差は広がっていく。

現在、広い東北と同じくらいのエリアを鹿児島大学の1カ所で医師派遣をしており、鹿児島県の医療機関が求める派遣医師の89％（1040人）の勤務医を鹿児島大学から派遣している。鹿児島大学が主に派遣しているのは中核病院であり、中核病院のところから人数が少なくなっているというのが現状である。これは鹿児島県だけではなく全国でも同じことが言える。その対として、文部科学省が医学部の定員を増やし、増えた分は地域枠医学生という制度により、地域で働く医師を増やそうとしている。

現在、鹿児島大学の地域枠出身の医師及び学生は116人に上る。地域枠学生に対し、県内のいろいろな地域で、各学年毎に特徴のある実習をさせていただき、地域で働くマインドを持った医師を育てている。